［ 地域づくりの台本 ］

文京区「こまじいのうち」
あえてつくる“ゆるやかさ”
楽しく巻き込む運営のヒント

いくつになっても、いきいきと暮らせるまちをつくる

東京ホームタウンプロジェクト

TOKYO=HOMETOWN PROJECT

Copyright©2019 TOKYO=HOMETOWN. PROJECT All Rights Reserved.

— お願い —

より一層みなさまの役に立つ資料をお届けするため、本誌に興味をお持ちになった理由や活用の可能性、ご意見・ご感想等をぜひお寄せください。
以下 QR コードか URL より、アンケートフォームでのご回答を心よりお待ちしております。

http://bit.ly/tokyo_chiiki

※掲載内容は、2019 年 1 月時点のものです。
最新の情報は「東京ホームタウンプロジェクト」ホームページにてご確認ください。
https://hometown.metro.tokyo.jp/

はじめに

この『地域づくりの台本』は、さまざまな活動に取り組んでいる地域団体・NPO のみなさま、地域活動を始めようとするみなさまに、日々の活動を運営する中で抱える課題を乗り越えるヒントとなることを目指してつくられています。個性的な取り組みを進める地域づくりの活動を取材し、活動の根底にある考え方と、活動のなかでの印象的なエピソードから、他地域においてもヒントとして役立てられそうなポイントを描き出すことに挑戦しています。

地域づくりには、ひとつの「正解」などはありません。地域の特性や活動の歴史、関わる人の考え方などによって取り組み内容は変わってきます。読み手のみなさまは、この資料に描かれた内容について共感できる部分や、参考にできそうなものを選び取り、それぞれの地域活動へと活用していただければ幸いです。

こんな問題意識をお持ちの方に

本誌では、多世代交流の居場所の象徴的な存在ともいわれ、毎年、数多くの視察者が訪れる文京区の「こまじいのうち」を取材し、子どもから高齢者まで、老若男女が出入りする場づくりにおける、立ち上げから現在に至るまでの取り組みのエッセンスをまとめました。
地域づくりに取り組む中で、次のような問題意識をお持ちのみなさまに、特におすすめしたい内容です。

○ 多世代交流の居場所の立ち上げに興味・関心がある。多くの人が集まるような居場所を立ち上げるには、どんな人や団体が集まり、どんな準備をしていけばよいのだろうか？まずは立ち上げの手順やポイントなどを参考にしたい。

○ 日々、いろいろな人が気軽に出入りできるような居場所を維持していくために、どんなことを心がければよいのか。肩肘張らずに続けていけるような、持続可能な居場所運営のヒントを知りたい。

○ 多くの人が視察に訪れ、居場所の事例として知られている「こまじいのうち」が、実際に、どのような人たちによって運営されているのか、また、その運営にあたって大切にしていることは何かを知りたい。

「東京ホームタウンプロジェクト」とは

団塊の世代が後期高齢者（75 歳以上）になる 2025 年に向けて、東京は、急速な高齢化が進展しています。こうしたなか、高齢者の介護予防や生活支援、生きがいづくりや社会参加の機会づくりなどに取り組む、地域団体や NPO など住民主体の活動に期待が集まっています。

東京ホームタウンプロジェクトは、「いくつになっても、いきいきと暮らせるまちをつくる」を合言葉に、東京の強みである活発な企業活動、豊富な経験と知識を持った多くの人たちの参加により、東京のさまざまなまちで活動する地域団体・NPO 等の活動を応援しています。

詳しくは、東京ホームタウンプロジェクトのホームページをご覧ください。

▶ https://hometown.metro.tokyo.jp/

この資料は「プロボノ」によって作成されました

仕事で培った経験・スキルを活かすボランティア活動のことを「プロボノ」といいます。

東京ホームタウンプロジェクトでは、地域団体・NPO 等による地域づくり活動の基盤強化を目的としたプロボノプロジェクトを推進しています。この「地域づくりの台本」を作成するプロジェクトも、東京ホームタウンプロジェクトの一環として、プロボノによって実現したものです。

本プロジェクトでは、日ごろ企業等に勤めるビジネスパーソン 5 名がプロジェクトに参加し、現場見学や団体の代表者へのインタビューをはじめ、スタッフ・ボランティア・利用者等へのヒアリングを繰り返しながら、活動のエッセンスを抽出し、成果物としてまとめていきました。

【プロボノメンバーのご紹介】

・プロジェクトマネジャー
　伏谷さん
・チームメンバー
　磯崎さん
　井上さん
　起田さん
　河村さん

目次

1｜「こまじいのうち」のご紹介 6

2｜「こまじいのうち」が大切にしているものとは？ 10

3｜「こまじいのうち」運営のヒント 14

4｜「こまじいのうち」まとめ 21

1｜「こまじいのうち」のご紹介

「こまじいのうち」には、居場所づくりのお手本として、多くのメディアの取材や、福祉業界の団体からの視察が来ています。

なぜ注目を受けるのかというと、ここが、地域のこどもから高齢者まで、月に 300 人、年間 4000 人を超える人が訪れる「居場所」として機能しているからです。ここでうまれた関係は、「こまじいのうち」を出ても続き、地域での暮らしに楽しさや安心感を与えています。

ここでは、そんな「こまじいのうち」の概要をご紹介します。

概　要

「こまじいのうち」は、文京区駒込の一戸建てや低中層の集合住宅が集まる閑静な住宅街にある、庭付き 2 階建ての一軒家を使った「居場所」です。

文京区は、5 年以上住み続けている人が約 7 割(平成 27 年文京区による世論調査)で、治安の良さからファミリー層にも人気のある地域です。また、周辺は大学や、六義園・寺社があり住民以外の出入りも多いです。

玄関扉を開き、中を覗くと、いつでも「おいでおいで」と呼んでくれる。そんな少し懐かしさのある、「こまじいのうち」は、「みんなのための居場所」です。

駒込地区町会連合会が主催となり、現在は NPO 法人居場所コムとこの居場所事業を運営しています。

そして、文京区社会福祉協議会が立ち上げ当初から寄り添い、円滑な運営のサポートをしています。

【基本情報】

名称	こまじいのうち
所在地	文京区本駒込 5-11-4
ミッション	みんなの居場所というリアルな場所を通して、地域の人たちの顔が見える地域コミュニティづくりを進めていくこと。 (NPO 法人居場所コム HP より)
設立	2013 年 10 月 1 日(オープニングセレモニー)
開所時間	火～金　10：00～15：00 ※土曜日は学習支援プログラムのため貸切 ※第 2 月曜日は小さい子ども向けプロブラム有
運営資金	・「地域の底力発展事業助成」(東京都の町会向け助成金)を、毎年町会連合で合意形成の上申請、取得。 ・駒込地区 12 町会からの協賛金 ・利用料(プログラムごと 100 円～300 円) ・「ふれあいいきいきサロン事業助成」 (文京区社会福祉協議会)

【写真】

＊外観＊
いつでも門扉が開き、必ず誰かスタッフがいます。
中の様子を覗くことができるのは、初めて来る方には安心ですね。

【立ち上げ】

2013 年 4 月。「空き家を居場所として活用したい」という文京区の地域活動センター担当者の思いと、「昔の、自然に人が集まり行き交う環境が懐かしい」という駒込町会のみなさんの思いが出会いました。そして、オーナーの秋元さんの家という「場」との出会いから、「こまじいのうち」はスタートします。

運営の体制

年に３回実行委員会を開催して、「こまじいのうち」全体の活動状況を共有し、課題を検討しています。実行委員会のメンバーは、運営の核を担う「コアスタッフ」のほか、「プログラム担当」などから構成されます。

目的　運営について、協力者と、理念やミッション・趣旨の合意を図る。
→立ち上げ当初から多くの人を巻き込み、「私たちの居場所」という感覚を共有。

メンバー
- 駒込地区町会連合会【主催】
- NPO 法人居場所コム【共催】
- 社会福祉協議会【運営パートナー】
- 民生委員
- ボランティア（地域でテーマ型の活動をしている団体）
- 居場所づくりの専門家（大学教授）
- 行政（地域活動センター）　等

活動方針　対象者：「高齢者・青少年・子育て中の世代」
コンセプト：「誰でも、気軽に立ち寄れる居場所」

プログラム

1. コンセプトに沿ったプログラム　（主催者：「こまじいのうち」スタッフ）

・カフェこま
「誰のため」「何をする」は決めていません。
参加者は自由に来て、自由に過ごすことができます。

2. 対象者に合わせたプログラム　（主催者：テーマ型活動をしている団体）

・高齢者→囲碁・麻雀
・青少年→てらまっち(学習支援)
・子育て中世代→ゆる育カフェ

≪こまじいのうちではこうして多世代交流がうまれました≫
別世代向けのプログラムが、同じ時間に隣り合ったスペースで開催されることで、多世代が同じタイミングに同じ空間で過ごすことになります。
すると、自然に参加者同士が混ざり合って、交流や助け合いがうまれるようになりました。

「こまじいのうち」を知ってもらうために

バザー

何をやっているかわからない空間に、足を踏み入れるのはハードルが高いこと。
ハードルを下げるため、バザーを開き、「居場所」とはどんな空間か知ってもらう機会をつくりました。

広報方法(チラシ)

印刷は地域活動センターが担当しています。
≪主な掲示場所≫
回覧板・掲示板・東京新聞の折り込み(近隣エリアのみ)
社会福祉協議会(「サロン」として一覧に掲載)

≪立ち上げ時のポイント≫　スモールスタート
徐々に開放時間や、スタッフの人数などを広げるよう調整していくことにした。

（当初）　毎週火曜日、隔週水曜
⇩
- 地域住民からのニーズを受ける
- 人手が確保できる

（現在）　火曜~金曜　毎日 10 時-15 時

スタッフの声

・この場所で、数えきれないほど多くの方々と出会い、その度に一生の財産となる沢山の思い出が生まれました。僕にとって、こまじいは第 2 の我が家です。
＜学生スタッフ代表・畠山さん、冊子「こまじいのうち　みんなの居場所。」抜粋＞

・みんなが家族のようにあたたかくて、笑顔がいっぱいの「こまじいのうち」。安心して暮らせる地域、信頼出来る人が出来たと思えたのは、「こまじいのうち」と出会ったおかげです。
＜ボランティアコーディネーター、近藤さん、同上＞

【取材記事・評価・表彰等】
・2018 年度「地域福祉優秀実践賞」
・社会福祉協議会からの視察(板橋区・狭山市等)
・「婦人公論」(中央公論社)
・大学生の訪問(大妻女子大学・武蔵野大学等)

2｜「こまじいのうち」が大切にしているものとは？

「こまじいのうち」が、立ち上げ当初から今に至るまで、多世代交流の居場所として大切にしているものとは何でしょうか？　スタッフのみなさんを代表して、理事長の秋元康雄氏と現在も運営に関わっている文京区社会福祉協議会の浦田愛氏にお話を伺いました。

理事長　秋元康雄さん

コミュニティにおける潤いのある場所を求めて、駒込地区町会連合会（12 町会）の皆さんが立ち上がり、駒込地域活動センター、文京区社会福祉協議会、各種ボランティア団体のご支援を受けて、平成 25 年 10 月に「こまじいのうち」をオープン。様々なプログラムが立ち上がり、建屋のリノベーションや、さらなる事業の充実を図るため NPO 法人を設立し、現在に至っています。

これからも、赤ちゃんからお爺ちゃん、お婆ちゃんまでの多世代が緩やかにつながり、笑顔の絶えない、潤いのある交流の場を目指してまいります。

文京区社会福祉協議会　地域福祉コーディネーター

係長　浦田愛さん

平成 24 年に地域福祉コーディネーターとして駒込地区に配置され、平成 25 年から「こまじいのうち」の立ち上げに携わりました。居場所づくりがどういうものなのかよくわからない中でスタートしましたが、走りながら、その都度、色々な方と話し合い進めてきました。今では、多くの方の故郷のような場所になっています。文京区では「こまじいのうち」がモデルとなり、居場所づくりに関わる多くの人たちが、必要な要素を学びに訪れるようになりました。その要素を参考にしつつ、それぞれの地域性などに合わせてどのような居場所を作っていくのかを地域の皆さんと考えるプロセスがとても楽しいです。

2-1：「こまじいのうち」の想いと、大切にしていること

Q「こまじいのうち」の想いとは？

（秋元さん）

A　私をはじめ、幼なじみのみんなも、昔は良かったよなという話から、こういう場所が生まれました。
カギかけるのは寝るときぐらいです。
寄ってらっしゃい、お茶でも飲んでらっしゃいと、ぞれぞれの家を行ったり来たりしたものです。しかし、今はそうじゃない。
この場所は、私のプライベートルーム、応接間的な場所でした。学生時代の友達を呼んで、ここで宴会したりしていたから、人が入ってくる事に抵抗はありませんでした。自分たちが子どもの頃は、そういう生活自体に、全然違和感がありませんでしたから。今、思えば、うちの子どもたちだって面倒みてもらって育ってきました。だからこそ「こまじいのうち」が、誰もが気軽に立ち寄る事ができる場として昔ながらの存在でありたいと思っています。

Q「こまじいのうち」の立ち上げに対して心掛けてきたところは？

（浦田さん）

A　一番大きいのは「だれでもの居場所になる」というコンセプトでした。必要以上にテーマ型のプログラムをつくると誰もこなくなるので、不必要なプログラムはつくらないように意識しました。今は、意図的に隙間時間をつくっています。住民の中にも、「プログラムはいらないんだよ、ただ場所があればいい」と言った方がいました。全くないのは難しいので、過多にならない程度にしていますが。
あとは、運営における「ゆるやかさ」も大事だと思います。
誰かが苦しくならないような役割分担をというのは気を付けています。

2-2：多世代交流について

Q　浦田さんからみて「こまじいのうち」に多世代が集うようになった理由は？

（浦田さん）

A　多世代とはそんなに最初意識していませんでした。はじめはターゲットとして、高齢者・青少年・子育て世代に向けたプログラムを入れていこうという話をしていた程度です。
「こまじいのうち」は２部屋にわかれていて、それぞれのプログラムを２部屋でわけてやっているうちに、だんだん混ざってきたというのが正直な感想です。
今、「多世代妄想」というのがあるなと思っています。
「こまじいのうち」では、同じタイミングで、子育て世代向けのプログラムや、中高生向けの学習支援プログラムを実施しているので、それだけで多世代だなと感じています。
高齢者が集まるおしゃべりカフェ、小学生向けのプログラム、そこでも交流があります。別々の世代を対象としたプログラムを同時間にやったからたまたま多世代になった。そこを赤ちゃんを抱っこしたスタッフが手伝っている。そういったことが意図せず多世代になっていると思います。

Q　多世代を横展開していくなかで、難しい面もあるのでは？

（浦田さん）

A　多世代を意識すると呼び込むのに労力がかかりますよね。同じひとつのプログラムで多世代が混ざり合うことは難しいと思っています。そもそも、興味関心が違いますから。
そこに手をかけるよりは、赤ちゃんをつれたママがおしゃべりしている間、高齢者が抱っこしてしてあげるというようなことではないのかなと思っています。
日本人って謙虚な方が多いので、頼まれないと動けないことが多いんです。
でも、「人手が足りないから手伝って」と言われると「いいわよ」と。
役割があることで、人と人とが交わるきっかけになるのではないかと考えています。

2-3：居場所づくりを目指す人へ

Q　今後、居場所を立ち上げていこうと考えている方に伝える事は？

（浦田さん）

A　立ち上げにあたって、初めからみんなで理解するプロセスを組織的に作っていくことが大切だと思います。なぜなら、後からだと人は巻き込めないんですよね。場所の名前を決めるとか、そういった場面が実は大事なんです。みんなで、理念やミッションを決めていくというプロセスを経て合意形成を行っていくことが大切だと思っています。
私たちは、常設で多機能な場所を「居場所」と定義しています。多機能というのはたくさんの活動をしているという解釈になります。単機能というのは月一回のもの。中機能だと週一回で互助的な支えあいを意識しているものです。
居場所といっても、喫茶店という人もいるし、コンビニのイートインが居場所という人もいますが、私たちが言う「居場所」においては「協議の場」というものが必要ですよという話をしています。
多機能な、たくさんの活動をしている組織体においては、みんなで協議する場が必要であり、合意形成をしていく上では、地域福祉コーディネーターのような調整役も重要です。
居場所が特定の誰かの家のようになってしまってはだめじゃないですか。でも協議の場があると、“みんなの家”という認識が出来るんです。

3｜「こまじいのうち」運営のヒント

さまざまな人が訪れる「こまじいのうち」。その運営には、スタッフの力が欠かせません。心地よく過ごせるように、スタッフは何を行い、どんなことに気をつけているのでしょうか。１日の流れを見てみましょう。

「こまじいのうち」の１日

いつ	誰が	何を
午前９時	秋元さん	玄関のカギを開けます。カギはスタッフ２人も預かっていて、秋元さん不在の時はスタッフが対応します
午前10時	スタッフ（基本２人）	「のぼり」を表に出すなど準備をし、「こまじいのうち」、オープンです！誰かが玄関先にやってきたら、「いらっしゃい！」と声をかけ、お茶を出します。利用者には、玄関先のリストに名前を書いてもらいます
正午ごろ	スタッフ	様子をみながら、買い出しなどに出かけてもＯＫ。利用者に留守番をお願いすることもあります
	利用者	台所や冷蔵庫の利用は自由。お昼ごはんもここで作れます
午後３時	スタッフ	利用時間終了。戸締まりなどをします
	秋元さん	玄関のカギをしめて、１日が終了します

≪「やることリスト」はいつの間にかなくなりました≫
最初は戸締まりを必ずするとか、掃除機をかけるとか、リストを作っていましたが、みんなのなかで分かってきたらリストがなくなりました。
誰かが手伝いたいと言ってきてくれた時も、いる人が教えています。スタッフは、食器洗いやタオルの洗濯、暇な時に掃除もしてくれています。誰かが来たら、声かける。決まりはないけど、自然にそうなっています。
＜秋元さん、浦田さん＞

≪スタッフも利用者も一緒に過ごす場所≫
スタッフは名札やエプロンをしておらず、誰がスタッフで誰が利用者かはわかりません。「お迎えします」という態度自体やめましょうと。あえて、誰が参加者かスタッフか分からないようにする。それがいいみたいです。会話は自由だし、若い利用者もお年寄りとおしゃべりできて、いろいろと勉強になりますよね。
＜秋元さん、浦田さん＞

「こまじいのうち」の１カ月

「こまじいのうち」では、「体操」や「ビーズ作り」といったいくつかのプログラムのほか、プログラムを設けず思い思いに時間を過ごす「カフェこま」が開催されています。

こまじいのうち

どなたもお気軽にお入りください お茶しましょう♪

～2018年7月のプログラム～

月	火	水	木	金	土	日
2	3	4	5	6	7	休館日
休館日	カフェこま 10:00-15:00(¥100) 布ぞうりを作ろう (材料費別) 10:00-15:00	カフェこま 10:00-16:00(¥100) 脳トレ健康麻雀 13:00-16:00(¥300)	カフェこま 10:00-15:00 利用料¥100	カフェこま 10:00-15:00 利用料¥100	貸切 (てらまっち) 13:00-17:00	
9	10	11	12	13	14	
ばびぶゃベビー 10:00-14:00(¥100) 流しそうめんするよー！	カフェこま 10:00-15:00 利用料¥100	カフェこま 10:00-15:00 利用料¥100	カフェこま 10:00-15:00(¥100) ビーズ教室 (材料費別) 10:00-15:00	カフェこま 10:00-15:00(¥100) おしゃべりカフェ 13:00-15:00(¥100)	貸切 (てらまっち) 13:00-17:00	
16	17	18	19	20	21	
休館日	カフェこま 10:00-15:00 利用料¥100	カフェこま 10:00-16:00(¥100) 脳トレ健康麻雀 13:00-16:00(¥300)	カフェこま 10:00-15:00(¥100) こまじいキッチン 12:00-14:00(¥300) 学生落語会 13:00-14:00	カフェこま 10:00-15:00 利用料¥100	貸切 (てらまっち) 13:00-17:00	
23	24	25	26	27	28	
休館日	カフェこま 10:00-15:00(¥100) 身あそびをやろう 10:00-15:00(¥100)	カフェこま 10:00-15:00(¥100) 学生落語会 13:00-14:00	カフェこま 10:00-15:00(¥100) ビーズ教室 (材料費別) 10:00-15:00 ガンバルーン体操 13:30-14:30(¥100)	カフェこま 10:00-15:00(¥100) おしゃべりカフェ 13:00-15:00(¥100) こどもあそび隊 14:00-16:00	貸切 (てらまっち) 13:00-17:00	
30	31					
休館日	カフェこま 10:00-15:00 利用料¥100					

★こまじいのうち地図は裏面にあります★

主催: 駒込地区町会連合会

問合せ:

Webページ: https://www.ibasho-com.org/komajii/
Facebookページ: 『こまじいのうち』
Email: komajiinouchi@gmail.com

◇こまじいのうち　近藤 070-6998-5114
秋元 070-6999-5114

◇寄付について　駒込地域活動センター(小澤) 03-3824-5801

◇ボランティアについて　文京区社会福祉協議会(藤本) 03-5800-2942

「平成30年度東京都地域の底力発展事業助成」対象事業

＊プログラムの一例

≪スタッフの調整は「壁掛けカレンダー」で≫
こまじいのうちには、壁掛けカレンダーが貼ってあり、スタッフは自分が来られる日を書き込んでいます。１カ月に何日参加する、という決まりはありません。誰がいつごろ来るかは、だいたい決まっているそうです。スタッフが確保できない日は、スタッフ同士で声をかけあったり、ボランティア担当スタッフが来られる人を募ったりしています。

≪プログラムのあとはみんなでお茶タイム≫
プログラム終了後は、参加者同士で協力し合って座布団や座卓をセッティング。お茶タイムが始まります。
近所の方が持ってきたフルーツや、お土産のお菓子を食べながら、スタッフも混じってみんなで近況やニュースについておしゃべり。自然に参加者同士の交流がうまれます。

「こまじいのうち」運営のヒント集

最初は「居場所」が何かなんて、分からなかった

Q立ち上げはどのように行ったのですか？

A（浦田氏）町会関係、民生委員など地域の方に声をかけ、ＮＰＯの方、社会福祉協議会の事業のボランティアの方たちもお誘いした。当時、誰も居場所って何なのか、分かっていなかった。実行委員会もよくあんなに集まったなと思います。分からないのに。

A（秋元氏）何だか分からないけど、声をかけられたから実行委員会に出てきてくれたと思う。説明を聞いているうちに、おもしろそうね、となってきたんじゃないかな。

地域＋テーマ型で「新しい風」が吹いた

Q地域外の方も参加したのですね

A（浦田氏）町会などの地縁関係者としては、地域活動センターの所長や秋元さんがいました。虐待防止などテーマ型の活動をしている団体は、私がパイプ役になりました。
地縁関係の方だと、行事など既にたくさん地域活動をしているので、更に新しいことをスタートするのはとても難しい。一方、テーマ型の団体を入れると、このエリア以外の人たちをお客さんと認めるかどうかという議論が実行委員会の中で起こったり…。でも、その中で、「ボランティアとかＮＰＯってエリアは関係ないですよ」という意見も出され、議論がどんどん噛み合ってきました。新しい風が吹いて、いろいろ決められたこともあったかなと思います。

最初に人を巻き込み、みんなで理解するプロセスを

Q立ち上げのポイントとは？

A（浦田氏）重ねてになりますが、まずは協議の場を立ち上げようという話をします。いろんなネットワークが必要で、いろんな人が入ってアイデアを出していくことが必要です。
最初に人を巻き込んでおいて、みんなで理解するプロセスを作っていかなければ、後からはやはり巻き込めないんですよね。
理念とかミッションのようなもの、趣旨など、そういったものをきちんと話し合って決めたよねと、合意をしておくというのが大切な事です。

組織にはコーディネーターが必要

Q組織を作ったときに必要となるものは？

A（浦田氏）組織体があると、合意形成が必要となるので、誰かがその真ん中で調整しなければ、なかなか上手くはいきません。そこで、協議の場と、地域福祉コーディネーターのような、調整役を担う人が必要になります。協議の場がある事で、みんなの居場所をつくっていくことができます。

知ってもらうため　あえて家の中でバザー開催

Qオープンして、最初から人が来てくれたのですか？

A（秋元氏）10 月にオープンして、12 月までは鳴かず飛ばず。「こまじいのうち」って何なのか、みんなわからない。秋元さんがなんか変なことやってると（笑）
（浦田氏）「こまじいのうち」で留守番してると、みんな表を行ったり来たり。入ってくるのはハードルが高いんだなと。実行委員の中に民生委員さんがいらっしゃって、バザーをあちこちでお手伝いされてる。だからバザーがいいんじゃないと提案があって。入ってもらうために、わざと家の中でやろうと。
（秋元氏）やってみたら、大勢来てくれました。そして来た人が、こんな雰囲気かと分かってくれました。

居場所は「いつでも開いている」ことが大事

Q最初から今のように毎日オープンしていたのですか？

A（秋元氏）最初は毎日ではなかったです。そうしたら、「せっかく行ったのに閉まっていた」と言われる事があり、毎日開けることこしました。来ようが来まいがかまわない。そうしたら、そこからお客さんが来はじめました。
（浦田氏）居場所は、いつでも開いてて誰かがいることが大事。それはやってみて後から分かりました。例えば、瓶を持って来て、ふたを開けてほしいとか。誰かがいて、行けば話せるというのが大事です。

あえて作った「すきま時間」で交流が生まれる

Q　こまじいの立ち上げに対して心掛けてきたところは？

A（浦田氏）一番大きいのは「だれでもの居場所になる」というコンセプト。必要以上にテーマ型プログラムをつくると誰もこなくなります。今やっている（カフェ型の）カフェこまなど、意図的に隙間時間をつくっている。そうすることで、お散歩中の人が入ってきたり、スタッフ間の交流ができたりしています。

肩の荷を減らすことで、手伝ってもらえるように

Q運営で心がけていることは？

A（浦田氏）「ゆるやかさ」です。誰かが苦しくならないような役割分担というのは気を付けていました。例えば、（玄関でプログラム参加料を箱に入れてもらう仕組みなので）今日は何人きたからお金がいくら入っているはず…などと数える管理のような業務など、何か背負ってしまうと負担になる。そういうのはやめましょうと。肩の荷を減らすことでみんなに手伝ってもらうようにしようと言いました。

誰かがリーダーシップを発揮している訳ではない

Q高齢社会となり、「地域で支えあう」がキーワードになっています

A（浦田氏）（みなさんも）「こまじいのうち」に実際に行って感じた事があるかもしれませんが、「こまじいのうち」って、誰かがリーダーシップを発揮しているわけじゃない。だから横展開できるんじゃないかと思っています。
成功しているところって誰か一人がすごくて、そこに引っ張られているというところが多いじゃないですか。そうじゃないかたちが出来ているかなと思います。

まずコーディネーターが引き受け、それから役割シフト

Q とはいえ、誰か引っ張っていく人がいると思うんです

A（浦田氏）居場所づくりをスタートする時、「誰が中核になるんですか」と言われるんです。でも「やりながら作っていけばいいじゃないですか？」と答えています。「こまじいのうち」も、最初はチラシづくりから色々な調整も含め、全てコーディネーターがやっていました。コーディネーターが全部まず引き受ける。それを細分化させていって、少しずつロールシフトしていく。みんながぶつからないように調整する。コーディネーターが行かなくてもできるようにだんだんと作っていく。そうすれば、一人のリーダーシップがなくてもできるのではと考えています。

「ざらざら感」がないか、常に見ている

Q運営で気をつけていることは？

A（浦田氏）「ざらざら感」がないか、コーディネーターが常に見に行っています。やすりをかけないと…って。
人の気持ちに敏感である、というのはコーディネーターに重要な要素だと思います。「ちょっとこんな

ことがあって…」といった、現場で気になった事をそれぞれが持ち帰り、それをみんなで相談しながら「さらさら」にしていきます。

ゆるやか運営、でもコアメンバーの役割は決まっています

Q「ゆるやか」という言葉をよく聞きました

A（文京区社会福祉協議会・藤本氏）コアメンバーが、月１回ミーティングを開き、細かいことを決めているのですが、このコアメンバーについては役割がはっきり決まっています。事務的管理、ボランティア関係、などです。
メンバーには、役職的な名前をあえてつけています。気持ちが上がるじゃないですが、「学生代表」とか。肩書あると、来るのが嫌じゃなくなる。

地域の人の「やってみたい」を形にしていく

Q「こまじいのうち」に関わる楽しさとは？

A（コアスタッフ・船崎氏）居場所は自分の意思で参加できるし、スタッフ、ボランティアとも繋がっている実感があるから、ここは「私のやってみたいことが出来る！」と思える場所だなと思います。自分の生きがい、自己実現、そこにもつながっている。私の実体験として、「子ども食堂をやりたいのよね」って浦田さんに言ったら、何カ月か後に「学習支援してる子の食事会をやってみない？」って、後押ししてくれて。浦田さんが、いろいろな経験を持つ地域の人に声をかけてくれました。そういう人たちが参加して、「やってみたい」が広がっていったと思います。
（浦田氏）「やりたいのよね」って一言いったら、「言いましたね」と（笑）。でも、そこには調整が結構必要です。子ども食堂を立ち上げたものの、すごくたくさん人が来ちゃうとか、逆に全然来ないということもある。どうするか。そこらへんを誰かが間に入ってやらないと、なかなか偶発的には…難しいですね。

掲示板や回覧板で広報

Q広報の仕方は？

A（文京区社会福祉協議会コーディネーター・藤本氏）チラシ、回覧板、掲示板。一部の新聞の折り込みにこのエリアだけ入れていたり、区の会館とかに置いてもらったりも。社会福祉協議会の「サロン」になると、文京区内のサロンの一覧があってそこに載ります。

4｜「こまじいのうち」まとめ

「こまじいのうち」から運営上のヒントを得たいと思われている方へ

まずお断りしておきたいのは、「こまじいのうち」の取材を重ねる中で私たちが考えた「運営のヒント」は、事実に基づいて客観的に確認できる事柄に絞り、ご紹介をさせていただきました。
これらの事柄には、タイミングや機会、ご紹介させていただいた方々のキャラクター（個性）による要素も大きく、再現性・汎用性の観点から考えると、これが成功の鍵だと確信をもって言い切れるまでには至っておりません。

ただし、これらが、「こまじいのうち」の円滑な運営に繋がっている事は間違いありません。それは、「こまじいのうち」に集う皆さんが、「楽しく」集まり、「楽しく」話をし、「楽しく」行動しているという事実からも感じる事が出来ました。

一方で、「楽しさ」を維持しながら円滑な運営を実現するためには、運営するための良い環境・条件が揃っていることと、手厚い周囲からのサポートが不可欠であることも確認できました。そして、このプログラムでもご紹介していますが、文京区の地域福祉コーディネーターの存在、役割が如何に重要かという事も知る事が出来ました。

その上で、以下に「こまじいのうち」と類似した活動を始めようと考えておられる方、既に活動はしているが何か運営上のヒントを探しておられる方に、この章をご案内致します。
また、別途ワークシートも準備致しましたので、併せてご活用ください。

私たちプロボノチームが気付いたこと

ここでは、「こまじいのうち」の運営において、「人」という観点から成功要因を考えました。その中でも、運営部分にフォーカスし、私たちなりの感想(気付き)も含め整理しました。

Q：どのようにして周囲を巻き込んでいるのでしょうか（リーダーシップの発揮）

《「こまじいのうち」では・・・》

運営者やスタッフがまずイベント参加者となり、率先して楽しみ、同じ立場で活動をしていることが多くみられます。それらの場面では、参加者とスタッフという壁を感じることはありません。仲良さそうな参加者が実は初対面や落ち着いて話をするのは初めてと聞いて驚くことも・・・。

《私たちが感じた気づきとは・・・》

周囲に対して、良かれと思い「指示」をしたり「説得」したりするリーダーシップは、時として「煩わしさ」や「過干渉である」との感情を生じさせる危険性があります。「楽しさ」が人を惹きつける基本であるならば、十分に注意することが必要となります。

周囲との意思疎通や相互理解が深まってくるまでは、同じ立場で自ら参画し、自らが自由な活動を率先して楽しんでいく「参加的」なリーダーシップをとることが大切であると考えられます。

Q：どのようにしてみんなの本音を引き出しているのでしょうか（傾聴する力）

《「こまじいのうち」では・・・》

拠点での会話を聞いていると、他の人の発言や意見を頭ごなしに「否定的な発言」で打ち消す場面を見ることは殆どありません。したがって、会話自体が否定によって途切れることなく、予期せぬ方向を含め話題が膨らんでいくことが多いようです。

《私たちが感じた気づきとは・・・》

多くの参加者、特に初対面の人が最初から本音を言うことはないと思います。従って、額面どおりに聞いてしまうと状況を見誤る可能性が大きいと思います。

相手の本音を引き出し「聴く」ためには、まず相手を受け入れることが必要です。本音をフランクに言ってもらえる仲間になるためには相手の考え方を含めて許容することが必要で、そのためには否定することによって感情的な悪印象を与え、活発な会話を阻害することは避けるべきと考えられます。

Q：どのようにして、みんなのやる気を引き出しているのでしょうか（動機付けの要因）

《「こまじいのうち」では・・・》

拠点での活動や環境等についても、立場や年齢・性別等に関わらず意見や感想を言い合っているようです。当然スタッフも一緒に考えて意見交換することが習慣化しています。傍から見ると、特定のスタッフというより全員が適度に運営に関わっている様に感じられます。

《私たちが感じた気づきとは・・・》

企業とは違い、報酬や評価といったものを与える事で参加者やスタッフに動機付けすることは難しいです。参加者やスタッフが居心地の良さを感じれば、無理に動機付けするまでもなく拠点に足が向くようになり、「習慣」として集まり、話をしていくようになれば、仲間との関わりが日常になり、活動に前向きな姿勢になるのではないかと考えられます。

Q：どのようにして外部の協力を獲得しているのでしょうか（交渉力の発揮）

《「こまじいのうち」では・・・》

拠点での活動に、社会福祉協議会や大学をはじめとする外部の団体の方が参加し、同じ机を囲んでお茶を飲んでいる状況は、協力してもらっている交渉相手という姿ではありませんでした。それは「こまじいのうち」の仲間そのものと私たちの目には映りました。

《私たちが感じた気づきとは・・・》

主に外部協力者との関係では、利害の調整という交渉手段は効果が薄いと思われます。

効果的なのは、協力を得たい外部協力者を内部に取り込んで、楽しみや空間・時間を共有する仲間として外部協力者の内部化を図ることです。団体の活動へ顔を出してもらうよう促し（交渉・要請）、無意識のうちに仲間であることが当たり前に思われる対応をすることが有効な交渉の在り方だと考えられます。

Q：意思疎通をどう運営にいかしているのでしょうか（コミュニケーション力）

《「こまじいのうち」では・・・》

代表者から「俺はこんな言い方しかできない」とか「難しいことはよくわからない」という言葉を聞くことがありますが、こういった言葉は自然と、周囲の連携や意思疎通を図るきっかけになっているようです。周りの方が阿吽の呼吸で助け舟を出している、という事もあるようです。

《私たちが感じた気づきとは・・・》

どのようなコミュニケーションをとるかについて、絶対的な成功方法はありません。

ご自分の得意・不得意を自覚し、周囲の方で誰がどのようなコミュニケーションが得意であるかを知れば、最も効果的な人にお願いするコーディネートができます。役割を意識するあまり不得意なことまで自分で背負い込むことは得策ではありません。思い切ってみんなに頼りましょう。自分の弱みを恥じるのではなく、明らかにして”頼んでみる”ことで意思疎通ができ、運営の円滑化につながると考えられます。

Q：どのようにより良い方向へ活動を継続しているのでしょうか（向上する心）

《「こまじいのうち」では・・・》

何気なくお茶の席で出た世間話やちょっとした思い付きが、口伝やノートで多くの人に広まることで思いもかけずに興味を引いたり、一緒にやりたいという賛同者が見つかったりすることがあります。トップダウンというより、日常活動から生まれたボトムアップが全員の協働活動や参画拡大を生み出しているように思われます。

《私たちが感じた気づきとは・・・》

向上心は大切ですが、具体的に向上させようと行動すると、想定しなかった軋轢や抵抗が表面化することが少なくありません。

そのようなケースの多くは、どうしたら向上するかという戦術に気を奪われ、どのような向上の仕方が良いかという戦略的な思考が疎かになっています。最短（トップダウン）での活動が必ずしもベストな考え方ではなく、むしろコミュニケーションを広げる方法を工夫することが大切であると考えられます。

以上

いかがでしたでしょうか？
この章が、皆さんの運営のヒントに繋がることを願っています。

さて、別紙にワークシートを準備致しました。
このワークシートは「こまじいのうち」の主な成功要因を抜粋し、皆様と一緒に考える事を目的に作成致しました。ご自身の状況確認に使ってみてはいかがでしょうか。

【ワークシートの見本】

「東京ホームタウンプロジェクト」ホームページより、データをダウンロードできます。

■ Work Sheet

「こまじいのうち」における運営のヒントについてKey Wordをまとめてみました。皆様の気づきにご使用ください

No	Key Word	こまじいの家では	皆さんならどう考えますか？
1	**多世代交流**	別世代向けのプログラムを2部屋で分けてやっているうちに、だんだんと混ざり合ってきたのが多世代の始まりです。多世代が同じタイミングに同じ空間で過ごす事。その交流が多世代交流となりました。	
2	**居場所** どんな居場所を考えていますか？	「だれでもの居場所になる」がコンセプトです！いつでも開いている事が大事だと考えています。そして、必要以上にテーマ型プログラムはつくらず、隙間時間をわざとつくるなど、交流をしやすい状況をつくっています。	
3	**広報の仕方** 居場所のアピールは?	チラシや、回覧板に掲示板。一部新聞の折り込みを近隣のエリアに入れる事もあります。文京区の社会福祉協議会でも案内をしています。	
4	**立ち上げのポイント** 広く皆さんに参加してもらうには	協議の場を立ち上げて、色々な人を巻き込みました。 それは、みんなで理解するプロセスを組織として作らないと後から人を巻き込むのは難しいと考えたからです。	
5	**運営で心がける事** 役割分担の考え方は？	「ゆるやかさ」です。誰かが苦しくならないように、役割分担には気をつけています。	
6	**地域福祉コーディネーター**	地域情報の提供や、人と人を繋げる重要な役割を担っています。 これらのスキルを活かし、様々な調整やアドバイスなど多岐に渡る支援を行っています。	
7			
9			
10			

— お願い —

より一層みなさまの役に立つ資料をお届けするため、本誌に興味をお持ちになった理由や活用の可能性、ご意見・ご感想等をぜひお寄せください。
以下 QR コードか URL より、アンケートフォームでのご回答を心よりお待ちしております。

http://bit.ly/tokyo_chiiki

※掲載内容は、2019 年 1 月時点のものです。
最新の情報は「東京ホームタウンプロジェクト」ホームページにてご確認ください。
https://hometown.metro.tokyo.jp/

委員からのコメント

― この冊子の活用にあたって ―

この『地域づくりの台本』は、2018 年に 4 回にわたる委員会でディスカッションを行いながら、企画、制作を行いました。

※掲載は五十音順

浅川澄一 氏（福祉ジャーナリスト）

日経トレンディ初代編集長。日経新聞の記者として 40 年勤務。

元日経新聞編集委員。現在は福祉ジャーナリストとして執筆・登壇等活動中。

ここには「こまぴよのおうち」という地域の子育て支援拠点（文京区の地域子育て支援拠点事業）が併設されていて、こまぴよの利用者がこまじいの方でお茶するなど、双方の利用者が混ざり合っている。こういった「ごちゃまぜ」の姿勢が多世代交流の場として成功する大きな要因になっていると思います。「空き家の活用」として多世代交流の拠点づくりを行うというのは、都心だけでなく全国的にも大きな可能性がある。その為には、空き家をどのように地域の拠点として取り込んでいくか、「こまじいのうち」はその一つの成功事例でもあります。

坂倉杏介 氏（東京都市大学 都市生活学部 コミュニティマネジメント研究室 准教授）

慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所特任講師を経て現職。「芝の家」や人材育成事業「ご近所イノベーション学校」運営のほかコミュニティ形成プロジェクトに多く携わる。三田の家 LLP 代表。

「こまじいのうち」の成功要素の一つに、誰かが特定のリーダーではない「スノーフレーク型コミュニティ」になっている事があると思います。自分とは違う人、ネットワークが重ならない人と一緒にやる、というのは実践の中で参考にできるところです。もう一つには、色んなプログラムをまず、やってみるという事。「多世代妄想」という言葉も出てきますが、“たまたま”“意図せず”別々の目的の人が来る。 5 年間やっているうちに混ぜ込まれて多世代の状況になっている。日々の運営の中での工夫もありますが、そういった“徹底してちゃんとしない”みたいな所なども、ひとつの規範として読み解いていきたい部分だと思います。

広石拓司 氏（株式会社エンパブリック 代表取締役）

シンクタンク、NPO 法人 ETIC.を経て、2008 年株式会社エンパブリックを創業。環境省 SDGs 人材研修事業委員・講師、慶應義塾大学総合政策学部、立教大学大学院などの非常勤講師も務める。

東京の中でも都市部に近い文京区には歴史の古い町が多く、東京のなかでも郊外部とはまた雰囲気が異なります。「こまじいのうち」をよく見ていくと、温かいながらも実はちょっと都会的な交流の場になっている事に気づきます。来る人はそれぞれ自分の好きな事をやっていて、互いに干渉しすぎない。少し来る時間が重なる事が続くうち、自然に互いに顔見知りになって…。些細な事をきっかけにして、少しずつ交流が深まっていくという新しいスタイルが出来上がっています。

『地域づくりの台本』

－ 地域づくりのエッセンスとディテールを描いた虎の巻 －

地域づくりに「正解」などない。だけど、地域づくりで「成果」を収めている事例はある。ここでいう成果とは、メディアに取り上げられたとか、誰かに表彰されたとかではなく、そこに関わる人が、自分の居場所を見つけ、新しい人とのつながりが生まれ、このまちの暮らしに安心や満足感がはぐくまれること。その地域づくりの活動には、どんな考え方があって、日々の運営は具体的にどのように行われているのか。『地域づくりの台本』は、地域づくりの現場の様子を掘り下げ、そのポイントを詳細に描き出すことで、“読んだ後に実行に移したくなる”を目指した事例集です。

板橋区「地域リビングプラスワン」

“誰でも受け入れる”から生まれる日常をシェアする居場所

高齢化が進む住宅団地の中で 20 代～80 代までが集うコミュニティカフェ「地域リビングプラスワン」。日常をシェアするというコンセプトのこのあたたかな空間を支えている、多様性を受け入れる運営のポイントとは？

文京区「こまじいのうち」

あえてつくる “ゆるやかさ” 楽しく巻き込む運営のヒント

バザーや子ども食堂、落語や体操など「こまじいのうち」には日々いろいろな世代の多様な人たちが集います。ほぼ毎日何かがある行事カレンダーが物語る、地域の多様な団体を巻き込む体制づくりのヒントとは？

小金井市「地域の寄り合い所 また明日」

デイホーム・保育所・寄り合い所 三位一体の“心を寄せ合う空間”

高齢者のデイホーム、乳幼児の保育や一時預かり、そして近隣の小中学生まで誰でも立ち寄れる寄り合い所。これらを三位一体で運営する「また明日」が、多世代交流を楽しく安全に実現するために、日々スタッフに伝え続けていることとは？

『地域づくりの台本』は、ウェブサイトからご覧になれます

https://hometown.metro.tokyo.jp/ 東京ホームタウン 検索